ボク?と彼女の不思議なカンケイ

九条　衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボク？と彼女の不思議なカンケイ

【Ｎコード】
Ｎ４７７７Ｉ

【作者名】
九条　衛

【あらすじ】
「好きです、付き合ってください」
突然だった、夏休み明け一日目、始業式の放課後に、僕は告白された。でも、僕には誰にも言えない秘密がある、これがある限り僕は……って、えぇ！！　僕の秘密を知ってるだって！！　しかも、ばらされたくなければ、付き合えだなんて、そんな無茶苦茶な……
（第６話以降の話を変更しました）

第1話　告白×秘密

「好きです、付き合ってください」
そう言われた。
夏休みが明けたばかりの始業式の日、学校の校舎裏、周りに人の気配は無い。目の前には、女の子が一人、制服についてるスカーフの色からして、同学年、高校二年生だ。
このシチュエーションは、その、つまり……
「一年生の頃から、ずっとあなたを見てたんです、新宮昌司(にのみやしょうじ)さん……私と、付き合ってください」
告白されたのだろう。
もちろん僕は焦った、彼女とは話をした事がなければ、顔も見たことがない、名前すら知らない、そんな相手から、いきなりの告白だ、これで焦るなと言うほうがどうかしてる。
「えっと、その、本気なの？」
つい、そう聞き返してしまった。本気なのは彼女の眼を見ればわかる。
「もちろんです！」
案の定、身を乗り出して、強く言い返されてしまった。
困り果てて、僕は結局、他人に助けを求めることにした。
(なあ、司(つかさ)、どうすればいいと思う？)
周りに人はいない、彼女が僕をここに連れ込むのに、他の人間が付いて来るのを許さなかったからだ。
でも僕には、常に一人、誰より信頼できる人物が付いている。
(どうしたらいいかって言われてもな……昌(あきら)はどうしたいんだ)
どういう事かと言われると……

―――僕は二重人格だ―――

ってことになる。
僕、いや、新宮昌司の中には、二人の人格が存在してる。僕はそのうちの一人、昌だ。今、僕の相談にのってくれているのが、司っていう、新宮昌司の中のもう一人の人格。
（そんなの、いきなり言われても困るよ、付き合う気はないし、それに僕には司だっているんだし、付き合うなら二重人格だって、言わなきゃならないから）
（それなら、しっかりと断るんだな。煮え切らない態度は、後で遺恨が残って言うだろ）
さすがは司だ、僕と違って、冷静に意見を言ってくれる。
（分かった、そうするよ）
僕は司との心の会話をやめて、彼女に向き直った。
「僕は…えっと、君の名前は？」
「絢香（あやか）です、山本絢香」
彼女、山本さんは、はっきりとした声で言った。
「じゃあ、山本さん……その、悪いんだけど……僕は、今、付き合えない。」
最後は、尻すぼみになってしまったが、それを何とか言いきると、僕は彼女の顔を見ないうちに、その場から、立ち去ろうとした。
しかし、立ち去ろうとした僕の手は、山本さんの手にしっかりと握られていた。
「なんで、ですか、断る理由を教えてください…それが納得のいく事だったら、手、放しますから」
「悪いけど、それは言えない…ほんとにごめん」
そう言って、僕は手を振り払おうとした、だけど、山本さんはさらに手を握って放してくれない。
そのまま、動けずに僕が固まっていると、不意に山本さんが口を開いた。
「その言えない事って……もしかして、多重人格のことですか」
「？」

その時の僕の驚きはすごかった、両親にさえ知られたことがない、僕の秘密を知られたのだ、驚かないわけがない。しかも、僕だけでなく、司さえことばを失って驚いていた。
「この前、昌司さんの後を追っていたら、屋上で一人きりなのに、話してる声が聞こえてきて……それで…」
その時、僕は驚きすぎて、なぜ僕の後を追っていたのか、それは所謂(いわゆる)ストーカーって奴なんじゃないかとか、そんなことは何一つ聞けなかった。
それでも、やっぱり、先にショックから解放されたのは司だった。
(昌、少し変わってくれ、僕自身で話がしたい)
僕は、なにもできず、ただ司に、身体の所有権を渡すことが、精一杯だった。

☆ ★ ☆ ☆ ★ ☆

昌と交代した僕はとりあえず、彼女、山本さんに聞きたいことを、いくつか聞いてみることにした。
「僕がどういう状態か、分かるか?」
山本さんは、少し考えてから、言った。
「えっと、司さんですか? 昌さんと今変わったんですよね」
そこまで分かるのか、こいつは。ストーカーも一回や二回じゃないな。
「ならもう一つだ、これまでこの事を、誰かにしゃべった事はあるか?」
「いえ、それはありません、安心してください」
今度は、川本さんは強く否定した。
それなら、いいか。もし誰かに話されていたら、大変な事になっていたが、誰にも話してないなら今口止めしておけば済むだろう。
僕はその時はそう思っていた。しかし、すぐにそれが間違いだと知ることになる。

「最後にもう一つ、質問させてくれ、お前は昌と僕どっちが好きなんだ？」
「へっ？」
僕としては真面目な質問だったのだが、山本さんは首をかしげていた。
「そんなの両方好きですよ、だって新宮昌司さんは、お二人で新宮昌司さんでしょう？」
「そういうものなのか？」
今度は、僕が首をかしげる番だった。僕からしたら、昌と僕は全くの別物だし、別々に見るものだと思っていたのだが、山本さんにとっては違うらしい。
いや、普通はこういう反応をするものなのかもしれない、他人から見たら僕らは《新宮昌司》という一人の人間なのだろう。
「まあ、それはいい、山本さん、理由が分かっているのなら、もう、腕を放してください」
「いやです、私は昌司さんをあきらめません……」
そんな、強情な、いい加減にしてくれ。
「そうだ、いい事思いつきました」
僕がうんざりしていると、突然、山本さんは僕の眼を見て、こう言った。
「付き合ってくれないと、あなたが二重人格だって、言いふらしちゃいます。」
「はぁ？　そんなこと……」
「学校中に言いふらしちゃいますよ」
こいつは、いきなり何を言い出してんだ？
「だから、付き合ってください」
あ～もう、何なんだ一体。
（どうしよう、司）
（どうしようもないだろう、こいつは本気で言う可能性がある）
（それなら、付き合うしかないの？）

（……もう知らん、後はお前で何とかしろ）
昌にそう言うと、僕は昌に体の所有権を押し付け、心の奥にうずくまった。

☆　★　☆　　☆　★　☆

突然、司から交代させられた僕は、山本さんに見つめられて固まってしまった。よく見ると、彼女の顔は可愛い。ほっそりした手首、ぱっちりした目、セミロングの髪は背中で結ばれていて彼女の持つ雰囲気にあっている。
「さあ、どうなんですか、ばらされたくなかったら、はい、付き合います、って言ってください」
そういうと山本さんは、もう一度僕の目を見ながら、一言一句ゆっくりと、言った。
「私と、付き合って、ください」
「ハッ、ハイ、付き合います」
そう言うしかなかった。
それを聞いて山本さんはニッコリ笑うと、僕の手をやっと放してくれた。
不覚にも、彼女のニッコリ笑顔にドキドキしてしまった僕は、手を放してくれたのに気が付いて、あわてて急いでその場を離れることにした。
「じゃあね、山本さん」
僕としては、その一言で終わりたかったのだけど、その言葉を聞くと、山本さんは再び僕の手を取った。
「付き合ってるんですから、下の名前で、絢香って呼んでください」
そうしないと、また手を放してくれなさそうだったので、僕は勘弁して、その名前を呼んだ。
「絢香……っ？」
また、あのニッコリ笑顔をされた。

そしてドキドキが抑えきれない僕を置いて、山本さ……絢香はスキップをしながら、去って行ったのだった。

第1話　告白×秘密（後書き）

はじめまして、九条衛と申します、今回「ボク？と彼女の不思議なカンケイ」という小説を書かせていただきました。どうでしょうか、まだ第一話で、正直僕にもこれからどうなっていくのか全くわかりません。よって次の更新がどうなるかも分かりません。あまり期待はしないで、でも、できるだけ楽しみにしていてくれたら、僕はとてもうれしいです。これから、よろしくお願いします。

第2話　偽恋人×幼馴染

翌日、僕は憂鬱な気分で、私立星涼高校への通学路を歩いていた。

「ねぇ、昌司、聞いてるの？　なんでそんな死んだ魚みたいな目になってんのよ、縁起の悪い顔がもっとひどくなってるよ」

横から声をかけてくるのは、毎日約束もしていないのに、登校途中で会う幼馴染の小早川皐月だ。

彼女は、僕の幼馴染なのだが、何かと僕の世話を焼いて来る。身長が高くて、僕よりも少し高いぐらいだ。すらっと足が長くて、髪は短い。運動が得意なくせに、なぜか運動部には入らず、僕と同じ帰宅部だ。

「うるさいな、皐月、僕は今、世界の理不尽さを嘆いているところなんだ」

「はあ？　なにそれ、意味分かんない」

そう、皐月は知らない、僕が二重人格だってことも、その秘密を人質にとって、絢香の恋人にさせられた事も……

（なあ、昌、起きてるか？　僕は疲れたから、おまえが皐月の相手をしてやってくれよ）

あの告白（脅迫？）の後、僕はまっすぐに家に帰った、昌は相当ショックを受けたようで、しばらくは放心状態だったのだが、夜にずっと起きていたらしく（僕らは寝る時間がバラバラで、寝てる間、もう一人が何をしていたのかは知らない）朝、僕が起きた時にはダウンしていた。

（うん、まだちょっと眠いけど、いいよ）

もう昌は大丈夫そうだったので、僕は昌と交代するため、体を入れ替えることにした。

☆　★　☆　　☆　★　☆

司(つかさ)と交代した僕は、ずっと気になっていた事を皐月に聞いた。
「皐月、同じ二年の、　山本(やまもと)　絢香(あやか)って知ってる？」
あの後、家に帰ってからも、僕の頭は絢香の笑顔でいっぱいだった、おかげで寝る前に何度も思い出し、ほとんど寝る事が出来なかった。
僕や司は他人の事に疎(うと)いから、絢香の事は知らなかったが、案外あの顔なら有名かも知れない。
「うん、知ってるよ、あの美人の子でしょ」
やっぱりだ。
「あっ、まさか昌司、あの子の事狙ってるの！？　やめたほうがいいよ！　あの子は絶対、競争率が高いから」
「いや別に、そういう訳ではないんだけど……」
逆に、告白されました。
「そっ、そうよね、昌司に山本さんなんて、高嶺(たかね)の花よね……それに、昌司には私だっているし……」
「？　なんか言ったか？」
最後のほうがよく聞こえなかったから、軽く質問しただけのつもりなんだけど、皐月は顔を真っ赤にしながら、あわてて言った。
「な、なんでもないっ、それより、山本さんの事だよね、どんな事が知りたいの？」
「えっと、そうだな、どんな子なんだ？　部活とかはやってるのか？　あと、彼氏とかの話はないか？」
最後のが、一番の疑問だが、他の疑問も知りたい事ではある。
「う～ん、性格はいいと思う、人当たりはいいし、目の前に困ってる人がいると、ほっとけないタイプ」
なるほど、人気があるのもうなずける。
「部活はやってないと思うよ、帰宅部」
僕と一緒だ、確かに絢香は運動が得意そうには見えなかった。
「彼氏の話は聞いた事がないなぁ……」
よかった、さすがに昨日今日で話は広まらないか。

「あ、でも告白した人から聞いたんだけど、山本さんは断り文句に、絶対こう言ったんだって……」
「え？」
「私には一人、心に決めてる人がいるんです、だからごめんなさい、って」
それはやっぱり、僕の事なんだろうな。
絢香は一年生のころから僕の事が好きだと言っていた、それはつまり一年生から今まで告白されてきたすべての人に、断りを入れているという事だろう。
一体、絢香がどれだけの人に告白されたのかは知らないけど、皐月の言い方では、おそらく一人や二人ではないだろう、それなのに、ずっと僕の事を……僕は顔が熱くなっていくのを感じた。
「なんであんたが顔を赤くしてんのよ。」
皐月が怒ったようにこっちを見つめてきた。こいつは怒ると眉がつり上がる、僕は昔からその顔が怖くてよく泣かされた、しかもたいてい怒る理由が分からない。
（なんでこいつは怒ってるんだ？）
（分からないお前が悪い）
司が突っ込んできたが、僕は何が何だかわからない。
（なんで？　司は分かるの？　じゃあ司が相手してよ）
僕は怒った顔の皐月から逃げるように司と交代した

☆　★　☆　　☆　★　☆

全く、なぜ昌は皐月の気持ちが分からないんだ。
そう思いながら、皐月と一緒に歩く。皐月は昔から新宮昌司の事が好きだった、特に彼女は昌とよく話す、おそらく無意識に僕と昌を見分けているのだろう。でも昌がその事に気付いてない。
そんな事を考えているうちに学校の校門についた。
「今日はまず掲示板に行かないとね」

「あぁ、そうだったな」
僕らが通う私立星涼高校は、少し特殊な伝統がある、それはクラス替えだ。
この学校は一年に三回クラス替えがある、つまり、一学期の他に、二学期、三学期にもクラス替えがあるということだ。だから、始業式の翌日である今日は、一度掲示板に見に行ってクラスをわかった上で、自分のクラスに行かなければならない。
「今回も同じクラスになれるといいね。」
隣りから皐月がそう言ってくる、僕は適当に返事をしながら、掲示板を見に行った。
掲示板に、クラス表がかかっている、まずは自分の名前を探す。
「二年二組か、クラスメイトは……なっ！！」
僕は動きが止まった、となりで皐月が、同じクラスだと騒いでいるのも聞こえない。

二年二組のクラスに、山本綾香の名前があったのだ。

僕が茫然としていると、宇井に遠くから僕を呼ぶ声が聞こえた。
「昌司さ～ん！　同じクラスになれましたね、とっても嬉しいです」
そう言いながら、こちらに歩いてきたのは、絢香だった。
「あ、絢香……」
つい、僕の口からこぼれたその言葉を、皐月は聞き逃さなかった。
「絢香！？　なんで名前で呼び合ってるのよ！？　どういうこと、山本さん」
「ああ、確か小早川皐月さんですね、どういうこともないですよ、何故なら私たちは、付き合っているからです！」
「やめろ！言うな！！」
止めるのが遅かった、ここは学校の掲示板、今日はクラス発表があるから、多くの人が集まっている。そんな中で突然大声での告白、どうなるかは目に見えている。

「あの子、山本綾香さんじゃないか、美人で有名な」
「相手は誰だ？」
「新宮君だって」
「新宮？　って事は小早川さんもいるじゃないか」
「何あれ、修羅場？」
案の定、周りが騒ぎ始めた。
「つ、付き合ってるですって！　どういうことなの、昌司」
あぁ、皐月の眉が限界まで釣り上がってる。
「いや、その、これは」
「どうゆう事もなにも、本当の事ですよね！　司さん」
「バカ、それは……」
こいつ、ここで司なんて呼ぶな、これじゃあ僕が二重人格だってばれて……
「司？　へー、そういうこと、自分たちだけの名前で呼び合って、そういうことなのね」
皐月、勘違いだ、そういうことじゃないんだけど、でも勘違いしていてくれたほうが……
「……昌司のバカ――――――――――――――――――――！！」
皐月はそう叫ぶとすごい速さで去って行った。
おいおいこれからどうなるんだよ……勘弁してくれ。

第3話　脅迫×告白

「私の名前は、山本絢香（やまもとあやか）、趣味は昌司（しょうじ）さんを見ること、特技は昌司さんの後を追いかけること、好きな人は昌司さんです」

ホームルーム、クラス替えの後という事で、自己紹介をしている、これは絢香の自己紹介。たのむから、やめて。

「なっ、なにを言ってるの！！　あんたは！！」

なぜか、また皐月（さつき）が怒りだした。さっき必死でなだめたのに。

あの後、教室に入った僕は、周りの空気に耐え切れず、チャイムが鳴って、先生が来るまで、ずっと机に伏せていた。

「何がですか？　私は事実を言ったまでですよ。あ、それと、私は昌司さんの彼女です」

「突然、何言ってんのよ！　ハイハイ、私は昌司の幼馴染です！！昔から昌司と一緒にいます」

教室がざわついた、さっき聞いた話なのだが、絢香と皐月は二年生の中でも美人で有名だという、僕は全くそんな話は聞いた事がなかったが、割と有名な話だと言われた、知らないのはお前だけだとも。

（どうしよう、司（つかさ）。）

（僕らには、どうもできない。昌（あきら）、がんばって耐えてくれ）

（それにしても、絢香のあれはしょうがないとして、なんで皐月も怒ってるんだろう）

（……はぁ、自分で考えろ。僕はもう疲れた、後は任せる）

さっきから司もこんな感じだし、ほんとにどうすればいいんだか。

「あ～……山本さん、もう自己紹介はいいです、小早川（こばやかわ）さんも座ってください」

ほら、担任の先生に止められた。まだ若い先生なのに、こんな生徒を持って、かわいそうだ。

皐月は、じっとこっちを見つめた後、席に着いた。いったい何な

んだよその目は。
こうして、僕は絢香と皐月、そして周りの目から一日中耐えなければいけなくなった。

キーン　コーン　カーン　コーン

やっと昼休みになった、これで皐月からの冷たい殺気と、絢香からの熱い視線という極限状態から解放される。
そう思ったのだが……
「昌さ～ん、一緒にお弁当食べましょうよ～」
「ダメよ、昌司は私と一緒にお弁当を食べるの！　それに、昌って何なのよ！？　司じゃなかったの！？」
僕は必死で廊下を疾走していた、後ろからは絢香と皐月が追いかけてくる。
「今日は一人で食べたい気分なんだ！　頼むから追いかけてこないでくれ！」
そう言い返すけど、二人は止まってくれない。
僕もそろそろ疲れてきたけど、止まれない、止まったらあの二人に何をされる事か……考えただけでも恐ろしい（周りの視線的な意味で）。
（ごめん。司、チェンジだ）
（やめてくれ、たのむ。おい、やめろっ――――）
僕は司を問答無用で引っ張り出した。

☆　★　☆　　☆　★　☆

昌に無理やり交代させられた僕は、目の前に迫っていた曲がり角を、あわてて曲がると、近くの教室に飛び込んだ。
「昌さ～～～ん」
「昌司ーーー！！」
絢香と皐月の声がドップラー効果を残しながら遠くに消えていく。

そこで初めて僕は入った教室を確認した。
二年二組、どうやら昌は逃げているうちに、校舎を一周してしまったらしい。道理で無駄に体が疲れていわけだ。
「よっ、おまえも大変だな」
僕が息を整えていると、誰かが声をかけてきた。
「ああ、悠二か」
声をかけてきた相手は宮村悠二（みやむらゆうじ）、僕と皐月の親友で、昔は三人でよく遊んでいた。もちろん悠二も僕が二重人格という事は知らない。
「ああ、じゃねえよ、この色男。うらやましいねー、二人の女に言い寄られる気分ってのは、どんな感じだ？」
「ほっとけ、何がうらやましいねーだ」
僕は投げやりに返事をしながら、自分の席から弁当を取り出して、少し考えた後、悠二のそばで食う事にした。
「いや、マジな話さ、なんで山本絢香とおまえが付き合ってる事になってんの？　俺はてっきりおまえは皐月と……」
「ああ、まてまて、順を追って話すから」
僕はあわてて悠二のセリフを止めた、昌は皐月の気持ちを知らないんだ、これ以上昌にそんな事を聞かされると非常に困る。
僕は教室中が聞き耳をたててる事を感じながら、悠二に話をした。
「実は、絢香と付き合ってるのは、その、嘘みたいなもんなんだ、無理やり付き合わされた感じで、僕も望んで付き合ってるわけじゃないというか……」
「おい昌司、ストップ、とりあえず、話をやめろ、そしてゆっくり後ろを見てみろ」
「は？　どうゆう……」
悠二に言われて、後ろを見るとそこには、涙腺が決壊三秒前の絢香と、胸をそらして勝ち誇っている皐月がいた。
「司さん……ひどい、無理やりなんて……」
「やっぱりそういう事だったのね、という事は、あなたは昌司の彼女でも何でもないのよ、私は幼馴染だけど」

皐月がいちいち聞いてもない事を言い出す、やめろ、これ以上絢香を刺激すると……
「そうですか、司さん……じゃあ、あの事をみんなに……」
「嘘ッ、嘘だって、無理やりなんて、そんなわけないじゃないか」
おもいっきり、無理やりだったんだが、僕にそんな事を言う権利は無い。
「本当ですか？　それなら、今、ここで私に好きだって言ってください」
瞬間、教室の空気が変わった、ついでに皐月の眉もつり上がった。
「ちょ、何言ってるのよ、昌司そんな事を言っちゃだめだからね！」
「言ってくれないんですか？」
絢香が僕の目をじっと見つめてくる、その顔を見ていると、まさか僕を脅迫してくる子には見えないのだが、彼女は今まさに僕を脅迫しているわけで……
「わかった、一回しか言わない……好きだ」
言った。
思いっきり頬をはたかれた。
「昌司のバカ！　最低！！　だいっっっきらい！！！！！」
皐月が教室を出ていく、僕ははたかれた衝撃か、それとも精神的なショックか、昌に体を渡してしまった。

☆　★　☆　　☆　★　☆

「皐月！　まって！！」
司から体と渡された僕は、急いで皐月を追いかけた。絢香も追いかけてくるかと思ったが、彼女がついて来る様子は無い。
「皐月、待って、僕が悪かった、だから落ち着いて」
「いや！　こないでよ！！」
何と言われようと僕は皐月を追いかけた。
校舎を飛び出し、校庭の用具置き場の前でやっと捕まえたときに

は、もうチャイムが鳴って、授業が始まっている時間だった。
「皐月、その、ごめん」
捕まえたはいいけれど、なにも言う事がなく、僕は謝るしかなかった。
皐月は何も言わない。
「その、いろいろあったんだ、それで……」
言い訳を必死に考えている僕を見て、皐月は首を振った。
「別にいいよ、昌司が誰と付き合おうが、昌司の勝手だもんね」
「そんなこと――――――ッ！！」
この期に及んで言い訳をしようとする僕の口を、皐月の口がふさいだ。
僕のファーストキスだった。
「好きだったよ、昌司」
それを言ったきり、皐月は僕を見ずに、校門へと歩いて行った。

第4話　話し合い×笑顔

あの後、僕が何を言っても、昌から反応は無かった。しょうがないから、僕が連れ帰ったのだが、次の日になっても、一向に回復する兆しはなかった。

（昌（あきら）、ショックなのは分かるが、いい加減に元に戻れ）

（うん、そうだね……）

朝からずっとこんな感じだ。

僕がそれ程でもないのは、結局、僕が昌ではなく、司（つかさ）だって言う事なんだろう。いまいちアレをされた感じがない。

（あれは、僕、司である僕にとっても、ファーストキスだったのだろうか）

そんな疑問に答えてくれる、もう一人の声は無い。

今は星涼（せいりょう）高校へ通学途中だが、いつもの道を通ってない。皐月（さつき）に会いたくないからだ。彼女に会うと、僕もそうだが、昌がどうなるか分かったものじゃない。

そう思うと、学校へも行きたくなくなるのだが……

そんな事を考えていると、遠周りをしたのに、ついに学校まで付いてしまった。教室の前まで行き、深呼吸。

「よし、いくか」

扉を開いた。教室中の生徒が、誰が入ってきたのかを確認して黙りこむ。

そう、それでいい。

何とも言えない空気の中、僕は自分の席に着く、この状態で僕に声をかけてくる奴なんていない。

「おい、昌司、昨日の皐月とのこと、詳しく教えてくれよ」

いた。空気を読めないバカが一人。その名は宮村悠二（みやむらゆうじ）

「悠二、おまえ一発殴らせろ」

「落ち着け、その拳を下げろ、ゆっくりとだ、そうゆっくり」

まあいいさ、こいつの無神経さは小学生から知ってる。
「おまえ、皐月に振られたのか？　それとも、振ったのか？」
殴った、グーで。
「ぐはっ」
倒れた悠二に、すかさずマウントポジション。もう一度拳を振り上げて……
「司さん！　一緒に来てください！！」
なんで、こんなに空気を読めない奴が多いんだ。
声をかけてきた相手は、何を隠そう騒ぎの元凶、山本綾香（やまもと あやか）その人だった。
「絢香、とりあえず、こっち来い話がある」
僕は綾香の手首を取ると、学校のベランダへと連れて行った。

ベランダに出た僕は、周りに人の目がないことを確認して、絢香に向き直った。
「話を聞く前に、一つ僕から言わせてくれ……あんな事があった以上、僕はこれ以上君の言う事を聞かない、たとえあの事をばらされてもだ」
言った、昨日一人で考えた苦肉の策だ、これ以上僕の平穏を乱してほしくない。
「あぁ、その事なんですが……」
もう少し、動揺したり、騒ぎだしたりすると思っていたのだが、絢香の反応は落ち着いたものだった。
「私、気付いたんです。あんな風に、無理やり言わせてもダメだって、ちゃんと心の底から、好きだって言ってくれないと、だめなんだって。だから、あんな事はもうしません」
絢香はそう言った、それは僕を無理やりの恋人としてではなく、一人の好きな相手として、真剣に見てくれた証拠なのかもしれない。
「でも私、小早川（こばやかわ）さんには、負けませんから、私の話はそれだけです」

そう言い残すと、絢香は教室に戻って行った。
（後は、皐月か……）
（……そうだね）
もう一人の僕は、それしか返してこなかった。

絢香に遅れて教室に帰った僕を待っていたのは、空の椅子と机。
皐月の席だった。
（皐月が、学校に来てない）
（……変わって、司）
強く昌に言われ僕は体を渡すことにした。

☆　★　☆　　☆　★　☆

司から体を変わってもらった僕は、教室を飛び出した。
後ろから、生徒の驚く声が聞こえてくるが、もう止まれない。
学校を飛び出し、皐月の家まで走る。
（おい、昌、何やってんだよ！）
司の声も無視して、僕は走った。
皐月が学校に来てないと言われた時、居ても立っても居られなくなったのだ。
（皐月に会って、どうするかなんてわからない。もしかしたら、もっと傷つけてしまうかもしれない。でも、皐月に会いたい！　会って話がしたい！！）
（……）
司は何も言わない。言っても無駄だと思っているのだろうか、呆れてるのかもしれない。
信号をこえて、公園を突き抜ける、そして、皐月の家の前に着いた。
チャイムを押す。
皐月の家は母子家庭だ、父親は僕が小学三年生の時に死んでしま

った。この時間だと母親も仕事でいないだろう。
「……なに」
しばらくしてインターフォンから反応があった、皐月の声だ。
僕はインターフォンに向かって、今の僕の思いを打ち明ける事にした。
「そのままでいい、聞いてくれ……僕は皐月の気持ちに答えられない」
インターフォン越しでも皐月が息をのむのが分かった。でも僕は構わず続ける。
「でも、絢香とも付き合ってるわけじゃないんだ、それはさっきはっきりした事だから」
反応は無い。
「だから……皐月には、笑っていてほしいんだ」
自分でも話の脈絡がよく分からない、心の中で司がため息をつくのが分かった。
「上手く言えないけど、そんな風にふさぎこんでる皐月は、らしくないと思うんだ、皐月は笑顔が一番似合うと思うよ」
言いきった、後はもう言う事は無い。
「……」
「……」
無言の時間が続いた。
すると、唐突に家のドアが開いた。
「まったく、誰のせいでふさぎこんでると思ってんのよ」
そう言いながらも出てきた皐月の顔は、泣き腫らして赤くなっていたものの、小さく笑みを作っていた。

第5話　再告白×恋敵

次の日、登校した僕を待っていたのは、皐月からのこの一言だった。

「あっ、司、おはよう」

なんでお前が知ってるんだ……いや、犯人は分かってる……

「司さ～ん、今日は一緒にお弁当食べましょうね～」

コイツだ。

「おい絢香、おまえ、なんでしゃべった」

「えっ？　だって、しゃべってもいいって、言いましたよね？」

言った。確かに言ったんだが……

「クラス中に言いふらしたのか？　それとも学校中……」

「やだなぁ、私が司さんに、そんなにひどいこと、するわけないじゃないですか」

それで脅迫するのはひどいとは言わないのか？　はじめて知った。

「教えたのは、皐月ちゃんにだけですよ。そうじゃないと、フェアじゃないですから」

ああ、そうかい、よかったね。なにがフェアじゃないのかは、あえて聞かない。聞きたくない。

（んっ？　今、皐月って呼んでなかったか？）

（仲良くなったんじゃない？　いろいろあったしさ）

まぁ、たしかに昨日は、思い出したくはないが、いろいろあったな。

あの後、もう皐月は大丈夫そうだったので、家から皐月を連れ出し、学校へ戻った。あのときの学校中からの視線は、一生忘れないだろう。怖かった、帰るとき外靴に画鋲があふれるほど入ってたときは死を覚悟した。

（僕は疲れたから、後は任せた）

（最近、疲れたっていうこと多いよね、老けたんじゃない？）

ほっとけ。

☆　★　☆　　☆　★　☆

昼休み。

休みって言うのは、本来、休むためにある。あたりまえだけど。

でも僕は心労で倒れそうだった。なぜなら……

「はい、昌さん、あ～ん」

「ず、ずるい。昌、私のもあーんして、あーん」

周りの視線が痛い、痛すぎる。視線に物理的ダメージがあるなら、僕はもう死んでる。オーバーキルだ。

「いいよ、自分で食べるから」

僕は自分の箸で、自分の弁当から、自分の口に運んだ。

（ごめん、司。疲れたっていう君の気持ち、分かった。分かったから変わってくれ、たのむ。）

（いやだ、僕にそこに出ていく勇気は無い）

薄情者め。僕は司に頼るのをやめて、友人に助けを求めることにした。

「悠二、助けてくれ。プリーズ、ヘルプ、ミー」

悠二は、呼んでいた文庫本から顔を上げ、こっちを見た。

「俺には、なぜおまえが助けを求めてるかが分からないんだが」

「分かれ。分からないなら、変われ、というかさっさと助けろ、バカ野郎」

悠二は何も言わず、読書に戻った。

「見捨てないでください、悠二さん」

「しょうがないな……じゃあ昌司を今日一日、自由に使用できる権利をオークションします。ハイ、百円出ました。そちらは三百円です、もういませんか？　おっとこれは三百五十円だ。さあ、ほかにはいませんか……」

なんで！？　なんでオークションが始まってんの！？　しかも、

それって参加するの絢香と皐月だけじゃないか、根本的な解決になってないんじゃ……あれ、他の男子も参加してる、みんな僕を助けてくれるのか、ありがとう、みんな。
「新宮を自由にできるんだぜ、殴り放題だ」
「血祭りに上げろ、生贄だ」
「まずは駿河問い（するがど）、その後はアイアン・メイデン・ジャンヌにぶち込んで……」
脱出！！　僕は教室を飛び出した。ちなみに駿河問いというのは、江戸時代の拷問の一つで、両手両足を縛り、吊り下げるという拷問。アイアン・メイデンは……言いたくないから自分で調べてください。
「逃がすな、捕獲しろ！」
なんで、悠二が仕切ってんの！？　僕は最初おまえに助けを求めたんだぞ！！
（助けて司。このままじゃ、あーんで、拷問で、死んじゃうよ）
（……どちらかが犠牲になるなら、僕は、僕は……）
（司……）
（昌を犠牲にする）
（この、鬼いいいぃぃ！！）
僕に味方はいないのか。

☆　★　☆　　☆　★　☆

昌が屋上まで逃げきったので、僕が変ってやった、というか、昌が動かなくなった。
（もう、誰も信じられない……僕は僕ひとりで生きていくんだ……）
心に深い傷を負っている。これは酷い、誰のせいだ。
僕らが休んでいると、突然屋上の扉が開いた。
「皐月っ――――――――ぐはっ」
逃げようとしたが、足が絡まってずっこけてしまった。
「司、あんた何やってんの。さっきのはもう終わったよ、みんな飽

きちゃって教室帰ってった」
「そうか……ところでさっきも思ったんだが、おまえ僕と昌の見分けつくんだな」
皐月が座り込んでいる僕の横までやってきてそこに座る。
「そりゃ、あんたとは長い付き合いだしね。私もはじめて言われた時は驚いたけど、なんか納得しちゃった。」
「そうか……」
僕は少し考えた後、思い切って言った。
「でも、おまえが好きなのは、昌だろう」
その言葉に、皐月は少し顔を赤らめた。
「やだなぁ、もう。確かに私は司のときの昌司より、昌の時の昌司のほうが好きだよ、でもそれって一緒じゃないの？　やっぱり昌司なんだからさ」
やっぱり、他人から見ればそうなのか……でも
「でも、僕は、別々のひとりとして見てほしい。昌司ではなく、僕は司で、昌は昌なんだから」
「……そっか、じゃあ私はあなたが好きじゃない、もう一人のあなたのほうが、私に笑顔をくれた昌のほうが好きだよ」
そのときの皐月の顔はまっすぐで、僕はなぜかどうしようもなく苦しくなった。
（僕じゃなくて、昌か）
（……）
昌は何も言わない。こういうときはだんまりだ。
「そうか、じゃあ皐月は昌の事が好きなんだな」
「うん、そうだね」
皐月の笑顔は、きれいで、でもそれは僕には向けられてないような気がして……

なんでこんなにも、僕は苦しんでいるのだろう。

☆　★　☆　　☆　★　☆

司が疲れたと言って、ひっこんでしまったので、僕は一人で屋上から空を見上げていた。
「昌さん……？」
皐月の事を考えていた僕の顔を、いつの間にかのぞき込んでいる顔があった。
「ああ、絢香、どうしたの？」
「いえ、ちょっと話したい事があって。」
そう言いながら、絢香はさっき皐月が座っていたところに座る。
「私、あのときからずっと考えてたんです」
「？　なんの話？」
「私が告白したとき、司さんが言ってたんです、司さんと昌さん、どっちが好きなのかって」
僕はドキリとしてしまった。さっき、皐月と話してた事じゃないか。その、司より僕が好きとか、どうとか……
もしかして絢香も……
「私、その、昌さんに言うのは失礼かもしれないですけど、司さんが好きです」
「……ああ、そう」
「ええ、その事だけ話したかったんです」
そう言って笑った絢香の笑顔は、さっきの皐月に似ているようで、でも僕の目には見慣れた皐月の笑顔より新鮮に見えてしまって。
ドクン　ドクン
鼓動が速くなる。
「だから、もう一度告白します。司さん、好きです……」
「……」
「じゃあ、さようなら」
そう言って絢香が去っていく。
痛い。胸が痛い。鼓動のせいじゃなく、何か針が刺さったような、

そんな痛みだ。

なんでこんなにも胸が痛いんだろう。

一人取り残された僕は、僕たちは自嘲した。

（司、どうしよう）

（ほんとにな……もしかしたら、どうしようもない事なのかもな）

（そうだね、まさか……）

《まさか自分が恋敵なんて》

僕たちは、チャイムが鳴るまで空を見上げていた。

第6話　学園祭×出し物

僕ら二人の関係と、彼女たちの関係はあのときから少し変わってしまった。

表面上はあまり変わったようには見えないだろう、今までどうり一人を二人が取り合っている構図だ。その証拠に周りの冷ややかな目は今日も僕に突き刺さっている。

「はい、司(つかさ)さん、あ～ん」

また周囲の目線の温度が下がった、このままいくと、絶対零度も超えるかも知れない。

「もうそれはいい、僕は自分で食べれる」

今、僕は絢香(あやか)と昼食を食べている。皐月(さつき)がここにいないのが、今までと少し変わったところだ。絢香と皐月は、僕と昌で担当を分けることにしたらしい。

どういう事かというと、≪新宮昌司(にのみやしょうじ)≫が僕、司になっているときには、絢香がやってきて、僕に精神攻撃を行う。逆に昌(あきら)のときは、皐月の精神攻撃を昌がくらう、どんな地獄だこれは。

（昌、絢香がいるぞ、変われ）

（いやだよ、そんな事をしたら、皐月がとんでくるじゃないか）

（……いいじゃないか）

（よくないよ、僕にとっては）

（（……はぁ））

僕と昌もあのときから、何かよそよそしくなってしまっている。

「司さん、昌さんと何を話してるんですか？」

「別に、何でもない」

というか、おまえは僕が昌と話していることも分かるのか。まったく、どうなってんだ。

僕は食べ終わった弁当をかたずけながら、ふと、気になった事を聞いてみた。

「ところで絢香、学園祭の出し物は決まったのか？」
あの夏休み明けの、僕が絢香の恋人にされた日から、もう一か月がたっている。学校は今月末にある学園祭に向けて、盛り上がっているところだ。
絢香は学級委員なので、
「う～ん、たぶん今日の放課後のホームルームで決めると思います。司さんはどんな事がしたいですか？」
「特に希望は無いな、うちのクラスの希望は何が多いんだ？」
「そうですね。お化け屋敷とか、クラス全員で演劇をやるとか……」
まあ、定番だな、
「あと、飲食店……メイド喫茶とか……」
それを提案した奴の馬鹿さ加減にあきれるよ、まったく、
「あ、それ提案したの俺だ、考えてくれてたんだな絢香ちゃん」
「悠二（ゆうじ）、お前バカだろ」
どうやら、提案したのはこのバカ、悠二のようだ。
「俺がバカだって？　そんなことないさ。ま、ホームルームを楽しみにしてるんだな」
そう言って、悠二はにやりと笑った。

☆　★　☆　　☆　★　☆

そんなバカな。
僕は目をこすった、そしてもう一度、黒板を見る。

演劇　　正正　（１０人）
お化け屋敷　正下　（８人）
メイド喫茶　正正正下　（１８人）

男子は一人を除いて、全員メイド喫茶にいれたようだ。ちなみに除かれた一人は僕。

悠二が司に言ったことの意味が分かった。
（そっか、美人の絢香と皐月を使えば、それなりに利益は……）
（ただ単に、メイド服が見たいってだけだろ）
だろうな……
「えっと、他に意見はありませんか？　ないなら、メイド喫茶で、決まっちゃいますけど……」
絢香も動揺してる。
「まあ、決まっちゃったモンは仕方ないさ」
お前が言うな、悠二。っていうかこんなもん、反対する奴ぐらい出てくるだろ。
「じゃあ、二年二組の出し物は、『メイド喫茶』です」
あれ、すんなり通っちゃった。
女子のほうを見ると、それ程嫌がっている様子は無いみたいだ。
「じゃあ、今日はこの辺で、準備は明日から始めます」
絢香がそう言ってこの日はお開きになった

第7話　ミスコン×メイド

僕らのクラスの出し物が、『メイド喫茶』に決まってから、しばらくして、

「おい、聞いたか昌司！」

登校した僕にいきなり声をかけてきたのは、バカの代表、宮村悠二だ。

「なんだ、とうとう自分の馬鹿さ加減に気が付いたか？」

「ちげーよ、ミスコンだよ！　ミ・ス・コ・ン！！」

「ミスコン？」

悠二は星涼高校の校内新聞を僕の机の上において、一面記事を指差した。

「なんと！　今年は今まで星涼高校がやらなかったミスコンを、生徒会が中心になって実現させたんだ」

「へー」

確かにそこには、星涼高校ミスコンテストの文字があった。しかし、僕はまったく興味が出ない、なんでこいつはこんなに興奮してるんだろう。

僕は机の上を陣取っている校内新聞を悠二に押し返すと、席に座って十行の準備をし始めた。悠二はまだ何か騒いでいる。

「それだけじゃない、このミスコンにはなんと、皐月と絢香ちゃんも参加するって話だ」

「なんだって！！」

僕は驚いて椅子から転げ落ちそうになった。

（そんなバカな……）

（あー、皐月ならやりそうだ……）

昌はそれ程驚いてないようだ。いや、確かに皐月はこういうのが昔から好きだった、でも、だからってミスコンに……

☆　★　☆　　☆　★　☆

司が放心状態になってしまったので、僕が変わった。司は僕の事も考えろとか何とか言っていたが、やがて心の奥に引っ込んでしまった。

「ミスコンは学園祭の最終日、二日目のキャンプファイヤーの前にやる予定だ。」

悠二が聞かれてもいないのに、勝手にしゃべりだす。

「ミスコンで、いけそう娘に目星をつけて、キャンプファイヤーで落とす、これだ」

お前に落ちる人間がいればね、そこは大きな誤算だぞ。

まったく、メイド喫茶の準備で忙しいのに、あの二人は……

すでに二年二組はメイド喫茶の準備に向けて動き出している、裁縫が得意な人はどこからか悠二が持ってきたメイド服をもとにコスチュームを作っているし、教室の内装もそれっぽくなっている。いつも授業に来た先生が壁にかかっているメイド服を見て何とも言えない顔になるのはしょうがない。

今日の午後は授業を全部つぶして、学園祭の準備をする日だ、僕は裁縫が得意ではないのでいつも内装を担当している。

だけど、今日はなぜかメイド服を作っている家庭科室に呼ばれていた。

（なにするんだと思う？　司）

（――――――――）

（司？　どうしたの）

まだ引きこもってるのかな？

司が返事をしないまま、僕は家庭科室についた、そこで僕を待っていたのは、

「あっ、昌さん、いらっしゃいませ～」

「昌、い、いらっしゃいませ」

メイド服の絢香と皐月だった。
メイド服はどうやら二人でデザインが違うようだ、
背の高い皐月には、シックな黒のメイド服、スカートが長く、メイド服特有のひらひらも抑え気味で、皐月のもつスッキリとした雰囲気を際立たせている。
逆に、絢香のメイド服は、ひらひら全開、いたるところにアクセサリーやリボンが付いていて、ヘッドドレスには大きな花の飾りが付いている。スカートは短くて少し回ると遠心力でスカートが広がって……
「どうですか、昌司さん？」
突然横から声を掛けられて僕はたじろいだ。
横を見るとクラスメイトの女子がこっちを見ていた。たしか手芸部の子で、メイド服を作る班のリーダーだ。
「メイド喫茶の衣装を決めていたのですが、この二つのどっちにするか、悩んでいて、男子の意見も聞こうという事で、新宮さんに来てもらった次第です」
「なんで僕なんだよ……」
「ささ、どっちをご指名ですか？　絢香ちゃん？　皐月ちゃん？」
「ご指名って……」
「ほらほら、二人も早くこっち来て」
だめだ、聞いてない。
手芸部の子は、僕を椅子の座らせると、絢香と皐月を呼んで僕の両側に座らせた。
「さあ、どっちのメイド服がいいですか」
言えるか！！
（助けて司）
（いやだ、絶対に）
今度は司と話せたが、即答だった。
しょうがない、こうなったら……
「どっちも似合ってるよ、うん両方きれいだ」

（ヘタレめ）
ならお前が出て来い。
「うーん、やっぱりそうですよねぇ、ならこのままで使いましょうか」
そう言いながら、手芸部の子は絢香と皐月を奥のほうへ引っ張って行った。
「あっ、新宮さんはもう帰ってもいいですよ。　……私としてはどっちか決めてほしかったんですが」
正直言うと、僕は絢香のほうが可愛いと思うけど……
（皐月のほうがいいと思わないか？）
……やっぱりな

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4777i/

ボク?と彼女の不思議なカンケイ

2010年10月14日23時06分発行